

長編奇想歴史小説



The Brave Flag of Yoshitsune

義経の征旗

上

中津文彦

Fumihiko Nakatsu

奥州藤原氏に身を寄せていた義経は、
頼朝挙兵に立つ。入洛した義仲討伐を決断し、
南下した奥州藤原秀衡軍を鎌倉で迎え撃つ。

『秀衡の征旗』改題



光文社文庫
KOBUNSHA BUNKO



光文社文庫

長編奇想歴史小説

よしつね せい き
義経の征旗 上

著 者 なか つ よみ ひこ
 中 津 文 彦

2004年 8 月20日 初版 1 刷発行

発行者 篠 原 睦 子
印 刷 豊 国 印 刷
製 本 ナ シ ョ ナ ル 製 本

発行所 株式会社 光 文 社

〒112-8011 東京都文京区音羽1-16-6

電話 (03)5395-8149 編集部

8114 販売部

8125 業務部

振替 00160-3-115347

© Fumihiko Nakatsu 2004

落丁本・乱丁本は業務部にご連絡くだされば、お取替えいたします。

ISBN4-334-73737-4 Printed in Japan

本書の全部または一部を無断で複写複製（コピー）することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター（03-3401-2382）にご連絡ください。

光文社文庫

長編奇想歴史小説

義経の征旗 上

『秀衡の征旗』改題

中津文彦

『義経の征旗』目次

第一章 頼朝よりとも挙兵

第二章 揺れる奥州

第三章 清盛死す

第四章 木曾の荒武者

第五章 秀衡の決断

第六章 鎌倉合戦

第七章 頼朝敗死

384 327 261 190 128 68 5

『義経の征旗』下 目次

第八章 草ノ根党の苦悩

第九章 驕おごる平家

第十章 都落ち、再び

第十一章 義経入洛

第十二章 屋島の攻防

第十三章 奥州軍、西へ

第十四章 武者の世に

第十五章 日ひ之本もと將軍

解説 細谷正充ほそやまさみつ

第一章 頼朝よりとも挙兵

一

治承四年（一一八〇）八月十七日。

この日の奥州おうしゅう、平泉ひらいずみは秋晴れに恵まれた、と古書からは知れる。

爽やかな風の吹き抜ける中、夕暮れとともに東の空には鮮やかな月が上ったことだろう。

仲秋の名月をすぎて二夜。

束稲山たばしねやまの上にかかった月はわずかに円まるみを欠いていたが、その煌々こうこうたる輝きが、秀衡ひでひらの脳裏にはまざまざと蘇よみがえっていた。

（あの夜は、判官成遠なりとおどのを囲んでの宴を催していたのだった——）

眩まばゆいばかりの燭台しよくだいの灯に照らし出された、宴席の光景が浮かんでくる。

夜更けまで続いたその宴が、ちようどたけなわの時分。

伊豆いずでは、頼朝の手勢が目代屋敷もくだいを襲っていたことになる。

平家打倒の狼煙が上がった瞬間だった。

が、そんなことはもちろん知るよしもなかった。そうと知ったのは半月余りもたつてからのことだ。

あの夜。

北上川の瀬音も間近に聞こえる柳ノ御所の大広間に、一族の者や重臣らが合わせて六十人余りも集まっていた。

秀衡の左隣には、客人の弓削ノ判官成遠。

右隣には舅の藤原基成。そこから左右に居流れて、息子の国衡、泰衡、忠衡、高衡、通

衡、頼衡。

対ノ座に、佐藤庄司基治、その叔父の河辺高綱、同じく伊賀良目高重。端のほうには、基

治の子、継信、忠信。

秀衡の従弟に当たる樋爪俊衡、その子の師衡、兼衡、季衡。

津輕の十三湊城主、安倍秀栄、その嫡男の秀元。同じく津輕藤崎城主の安東貞季、嫡男の

亮季。

三条吉次信高の顔もあった。それに、勇将、金剛別当季綱。出羽ノ守将、田河太郎行文、

その弟、秋田三郎致文。

奥六郡一の猛将、伴ノ藤八。金ノ平六、金ノ十郎の兄弟。そして、河田ノ次郎、由利八郎、

等々。

前日の夕暮れに平泉に着いた弓削ノ判官成遠は、公儀の客人ではなかった。大藏卿、一条長成の家侍で、長成の使いでやってきたにすぎない。

それにもかかわらず政庁の大広間で宴を開き、大勢の家臣をはべらせたのは、京の都や福原の近況を直に聞ける、いい機会だと思ったからだ。

陸奥、出羽の各地を治めている一族、重臣たちが、折りよく平泉に集まっていた。

八月十五日の夜は、毎年恒例の月見の宴が開かれる。秀衡から政事の方針や指令が伝えられ、領内各地の収穫の状況や情勢報告が行われ、その後は飲めや歌えの大騒ぎとなる。

酒宴は延々と翌日まで続く。

正月では雪が深く、全員が集まるのはむずかしい。そのため、この仲秋の月見の宴が、奥州では最大の年中行事となっていた。主だった者たちがそろっていたのは、その直後だったからだ。

大宴会の後ただだけに、さすがの酒豪ぞろいも少々うんざりした顔をしていた。が、成遠の土産話はやはり興味深いものがあり、誰もが熱心に耳をそばだてていた。

何しろ、このところ次々と驚かされることばかりが起きている。

去る四月。

遠く京の都では、源頼政が以仁王を奉じ、ふいに兵を挙げた。

この乱はほどなく平家に鎮圧されたが、六月に入ると、今度は平清盛の命によっていきなり都が摂津国の福原に移されることになったのだ。

そんな折りである。成遠の来訪は、最新の状況を聞けるまたとない好機と言えた。

過分な歓待、と思つたのだろう。初めは戸惑いを見せていた成遠だったが、酒が進むにつれていい機嫌になり、舌も滑らかになっていた。

「福原の暮らしは、それはひどいものでしてな。何しろ、邸宅がまるで不足しておるのです。池ノ頼盛さまの山荘を飯の皇居と定められたのですが、ご不便なことは申すまでもありません。ましてや、公卿、殿上の多くのご家族から家人の端まで暮らせるような屋敷などは、どうにも足りないのです。大慌てで都造りを始めておるのですが、出来上がるのはいつのことになりますやら」

成遠は、深々とため息をついた。

「ほう。相国どの（清盛）は、本気で都造りを始めておられるのか」

秀衡には、思いがけないことだった。

遷都とは言つても、おそらく一時的なものだろう。そう読んでいたのだ。

清盛と後白河法皇との確執は今に始まつたことではないが、今回は少きついお灸を据えるぐらいのつもりで京都を引き払い、自分の別邸のある福原へとお連れになつたのだろう。

そのていどに見ていたのだが、あるいは永久的な遷都を考えているのか。

成遠が、大げさに顔をしかめて見せた。

「何の、あの御方の思いつきは今に始まつたことではないのです。振り回される周囲こそ、まことに迷惑と申すもので。福原の近く、和田の松原から西野と申すあたりに、九条に道割りを

するのだとかで普請が始まっておりますが、縄張りをして人も人夫が足りない。ようやく人夫をかき集めれば、人夫小屋が間に合わない。小屋ができれば、今度は賄いが行き届かず、腹をへらした人夫どもが逃げてしまうというありさまです」

一座の者たちから、どつと笑いが起きた。

「長成卿は、どうしておられる？」

秀衡の頬にも苦笑いがある。

「はい。京の住まいの半分にも満たない小さな屋敷に、二家の同居を割当てられたのですが、使えるのはわずかに四部屋という暮らしです。そこに、ご家族やら私などが、身を小さくして寝起きしておるありさまです」

「それは、ご不便であらう」

「はい。それに、莊園からの年貢も滞っております。それはもう、お気の毒な——」
成遠は言葉を濁し、ちらと上目遣いに秀衡を見やった。

何の用向きで、遠く、はるばると平泉まで訪ねてきたのか。成遠を使いに出した長成の胸の内は、秀衡にはとつくにわかっていた。要するに、援助が欲しいのだ。

清盛の強引な福原遷都で、公卿殿上のほとんどが生活苦に陥っているらしい。そのことは、秀衡も京都の出先から報告を受けていた。

各莊園からの年貢米搬入の仕組みが、狂ってしまったのか。あるいは、莊園を預かる者たちが、この混乱を幸いと狡く構えたのか。

年貢米は、出来秋から翌年の夏にかけて何度かに分けて運ばれるのだが、福原に移ってからは、公卿たちのもとにはさっぱり届いていないらしい。

手にした杯を干して、成遠が明るい声を上げた。

「こちらの都は、ご繁栄でようござりますなあ。久しぶりに参りましたが、前にも増しての賑わいぶり。つくづくとうらやましくなりました。基成さまのご炯眼、改めて感じ入りました。ございます」

そう言うのと、秀衡の隣にいた基成に向かって、ややわざとらしく目礼した。

「何の、わしはただ成り行きでこの地に馬齢を重ねただけのこと。平泉の繁栄は、ひとえに御館のお力のたまものじゃ」

六十を少しすぎているか。白髪の男が、唖れた声で言った。

京都で生まれ、育った、上流貴族の匂いが漂う。年に応じた衰えは隠しようもないが、小さく光る両眼にはまだまだ強い力が漲っている。

藤原基成は、朝廷を牛耳る藤原一族の中でも名門とされる家柄の出だ。身は小柄でも、あたりを威圧するような貫禄があるのは、その出自と己の頭脳に自信があるからなのだろう。

「今や、こちらの都は間違ひなく日本一の町にございます。京の都の寂れようと申したら、それはもうひどいもので。旅の途中に立ち寄ったのですが、思わず涙が溢れてしまいました」
成遠の目には、偽りのない悲しげな色が浮かんた。

「しかし、遷都とは申しても、住む者が一人もいなくなったわけではあるまい」

「町家の者どもは、多くが残っております。それと、物乞いや浮浪人、夜ともなれば盜賊の類。これらを、住む者とは申しません」

「ふーむ」

基成は憤りのこもった吐息を漏らした。

「公卿殿上のお屋敷は、次々と取り壊されて福原へと運ばれております。その跡は、ただもう茫々たる草むらです。賑わいを見せておるのは、六波羅の界限のみ」

六波羅には、平家の政庁や主だった者たちの屋敷が並ぶ。福原に移っても、主従は頻繁に往來して、留守を守る多くの家人もおるのだろう。

「忠子も、基通卿とともに福原に参ったのであろう」

基成は、さりげなく妹の消息を質した。そのことは、とつくに便りを得て知っているのだが、その後のようすを聞きたかったのだ。

「はい。近衛さま（基通）のご権勢は、それはもうたいそうなもので。福原に参りましても、母君さまともどもつつがなくお暮らしにございます。この春には、摂政にお昇り遊ばして、まさに日の出の勢いと人は申しております」

「基房どののご家族は、どうなされた？」

「近衛さまに比べ、前ノ関白さま（基房）のご家族のほうは——。あ、いや、詳しいことは存じませんが、福原には参っておられぬようで」

「京都に残っておられるのか」

「そのようでございますが——」

成達は、語尾を濁した。

基成の妹の忠子が嫁いだのは、藤原基実もとざねという摂関家、藤原一族の氏ノ長者ちやうぢやだった。

弱冠十六歳にして関白となり、二十三歳で摂政にと人臣の最高位まで昇り詰めた。が、その翌年夏、急死する。十四年前のことである。

嫡子ちやくしの基通は、当時まだ七つだった。

父の後を継ぐには幼すぎ、基実の弟の基房が氏ノ長者となり、関白となった。

ところが、基房は遺領相続のことで指図を受けた清盛に不満を抱き、やがて平家の力を削ぐうとする後白河法皇との結びつきを強めていった。

法皇の周囲には、この基房をはじめ、平家に反感を抱く多くの上級公卿が、しだいに寄り集まっていた。

しかし、清盛がそれを見逃すはずはない。

去年、治承三年（一一七九）十一月のこと。

清盛は朝廷を恫喝どうかつし、関白基房をはじめ、太政大臣藤原師長もろなが、按察大納言藤原資賢すけかたなど、法皇の近臣三十九名を突然解任し、遠流おんるに処すと厳達した。

まさに前代未聞の荒療治だった。

基房は九州に配流とされたが、髪を下ろしたことで備前びぜんの国府へと配所替えになり、師長は尾張おわりへと、それぞれ遠国に追われていった。

この大弾圧に伴って、基通が氏ノ長者の座に就き、閑白となった。そして、年が明けて間もなく、二十一歳の若さで摂政となったのだ。

基成にとつて、甥に当たるとこの青年公卿の出世がうれしくないはずはない。

しかし、基成の胸中には、平家への根強い不満と反発がある。基通の出世は当然ながら清盛の引き立てによるもので、それを思うと少なからず複雑な感慨を覚えるのだった。

「判官どの。以仁王と源三位頼政どの蜂起のその後は、どうでござる？」

秀衡が声を改めて質した。

「はい。挙兵の数もそう多くはありませんで、大方の者どもが討たれたと聞いております。平家の残党狩りも厳しく、もはや騒動はすっかり収まったようですが」

「うむ。騒動は収まったであろうが、同様の不穏な動きは、他には聞こえて参らぬのか」

秀衡の聞きたいのは、それだった。

「以仁王の令旨りやうじとやらを携えて、どなたやらが諸国の源氏の主だった者たちを回っておられるらしい、という噂は聞いております。確か、亡き左馬頭さまさまのかみ（源義朝みなもとのよしとも）の弟君だとか」

「ほ、ほう」

頷いて、秀衡はふと一座を見渡した。

義経の姿がない。そう気づいたのだ。

「九郎くろうどの、どうしたのだ」

傍らの泰衡に顔を向ける。

「は。お誘い申してあります。ほどなく見えられますでしょう」

泰衡が、微かに苦笑いしたように見えた。

「そうか」

秀衡も、ただ短く頷いた。

判官成遠が訪ねてきたと知っても、義経はあまり会いたくはないのだろう。成遠の仕える長成のもとには、母親の常盤が嫁いでいる。そのことが、義経にとっては不快きわまりないらしい。

義経にとっては、どのような事情があつたにせよ、母の再婚は認めたくないものようだった。たとえ、それが自分たち幼い兄弟の生命を救うためだったとしても、だ。

だが、その義経もこの地にきてからすでに六年。二十二歳の若者に成長した。

大人の世界の営みを、そろそろ理解してもいい年ごろではないか。泰衡の遠慮がちな苦笑には、そんな含みが感じられた。

平治の乱で父義朝が敗死したのは、義経がまだ乳飲み子のときだった。母の常盤は、義経を懐に抱き、その兄の幼児二人の手を引いて大和路へと逃げたが、やがて観念して清盛のもとへ出頭した。そして、しばらくして一条長成と再婚させられたのだ。

物心ついた義経は、従つて長成邸で成長したのだが、長成が実の父でないことはもちろん知っていた。

それだけではない。

長成と再婚させられる前、常盤はどうやら清盛ともいわくのある間柄だったらしい。つまり、清盛は、敵将だった義朝の女を横取りし、やがてこれに飽きると長成に押しつけたのだろう。母の立場を考えれば、か弱い女の身を哀れとは思ふ。が、そうした理屈とはまた違う激しい憤りを、この多感な少年は抑えることができなかった。

そのような屈辱に耐えてまで生き長らえるよりは、むしろ死んだほうがましだったのではないか。そうさえも思えてならない日々が続いた。

幼い兄弟三人は、仏門に入ることを条件に生命を保証された。兄二人は早くにそうしたが、義経は七つまで長成邸で育った後に鞍馬寺くらまでらに預けられた。

が、出家するつもりなどまるでなかった。

十四、五歳になり、髪を下ろせと迫られると、義経はあからさまに反抗するようになった。そのようなすを知った常盤が、どれほど胸を痛めたことか。

もし平家の耳にでも入れば、厳しい処罰を受けるのは間違いない。下手をすれば死罪だ。

その苦悩を知った長成も、義父の立場から心を砕いた。

常盤や義経への愛情から、ということではない。万が一のさい、自分の身に累が及ぶのを恐れたのだ。

この長成が、遠く奥州の地に暮らしている基成のことを思い出したことから、義経の運命は大きく変わっていった。

長成は、基成の父親とは従兄弟同士だった。